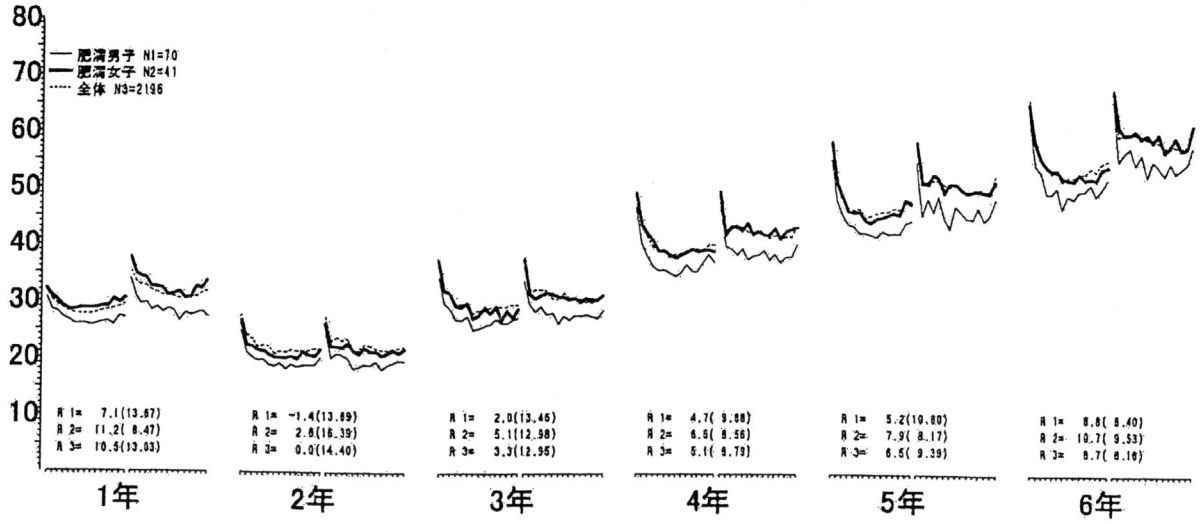

図12－4 肥満児の性別・学年別平均曲線

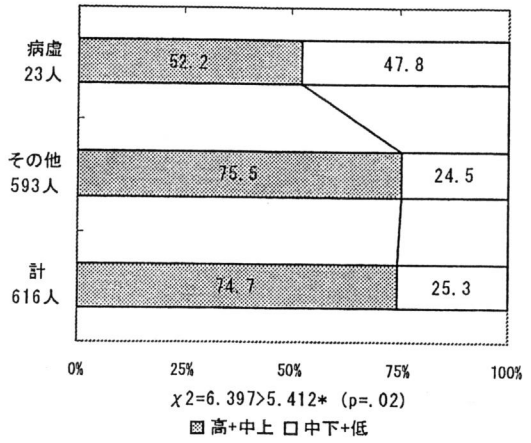

図12-5 孤高型における病虚弱と健康度分布：%

このような結果を得た背景として、身体の大きい子は早熟であり、小さい子は晩熟であることが考えられる。タナー（1994）は早熟児の最大発育量のおこった時の平均年齢を男子で12.2歳、女子で10歳とし、早熟と情緒的成熟度が関連していることを指摘している。児童期は、身体的・精神的発達の顕著な時期であり、これらの個人差が表れていると捉えることができる。身体の小さな子の曲線傾向が5、6年次にかけて普通の子の経過に接近して下降が弯曲に転じたことは、追いつき成長によるものであろう。

iii　肥満と病虚弱による精神発達

i）肥満児

経済成長期は飽食時代への移行期であり、成人病予備軍としての肥満の問題が子ども社会にまで蔓延しつつある。本小学校の肥満児136名の出現率は各年平均5.44人、1クラス2名弱（1.81）であった。

i））平均曲線：図12-1

病虚弱児に比べて休効が低く、作業量も少なめ、その他の子と比べて明らかに下位にあった。とくに下降傾向が5年次まで認められ、気力に欠けやすく、根気不足が継続していた。3-1dじっくり型と8ぽっつり型は上昇曲線あるいは緩みのない曲線を示すにもかかわらず、平均曲線では下降曲線の示される点が肥満児の特徴であろう。人がよく協調性があっても、悲観的に弱気になったり、みんなについていけずあきらめたりする行動特徴がついて回る。

ii））精神健康度分布：図12-2

精神健康度3群比較を見ると、高・中・低度がほぼ3分されるのに対し、その他の子どもたちは高度群が多く低度群が少ない傾向がみられたが差は認められなかった。肥満が即精神的不健康に結びつくわけではなかった。

iii））人柄群別分布：図12-3

図12-3に見る通り、身体の大きな子に認められたクレッチメルの躁鬱性格者=肥満仮説は証明されなかった。（図12-3）

肥満児とその他の集団では出現率に差はなく、

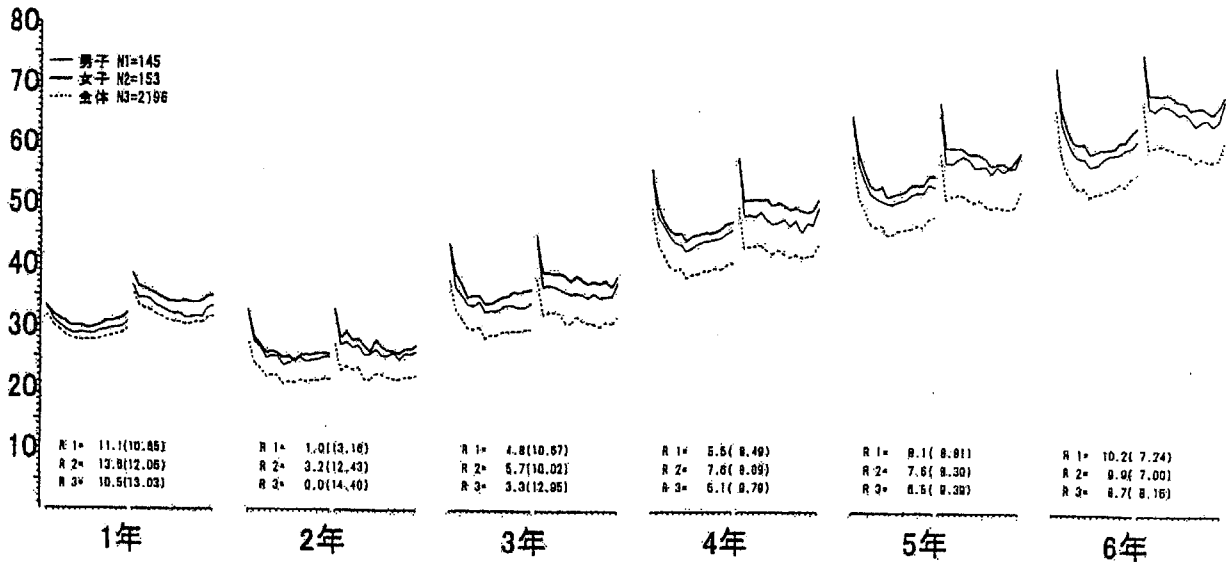

図１２－６　学業優秀児の性別・学年別心的機能の発達特徴

どんな個性でも肥満の発生率は 136÷2735×100=4.97%であり、体育をはじめとする生活行動で支障がでるような肥満傾向は、20 人に 1 人と教師が見ていることになる。肥満係数による客観的評価はしているが、1 クラスに 1～2 人は目に付く子がいるのは実感であった。

ⅳ)) 性差：図 12-4

女子の肥満児は全体平均とほぼ同じ経過をとり、肥満が大きな影響を与える姿は認められなかった。しかし、男子は明らかに平均よりも作業量が低く、休効も 6 年次を除いて低めであった。更に、下降傾向が一貫して認められ、女子の 2 倍近い多人数がいる割に 5～6 年次の曲線動揺が大きい（男：女=88：49 人、64.2：35.8％、CR（88.49）=3.33,p=.01)。進学問題がテーマとなる高学年次に気力不足に輪をかけて情緒不安定が拡大しており、肥満全体の曲線特徴は男子により強く表れていた。肥満児の情緒不安定は、船越（1993、1997）が指摘するように皆から極端に離れた身体的特徴はそれ自体が大きなストレスになること、また、村田（1979）や加賀（1989）が指摘しているように、運動能力や集団への参加度の低さ、劣等感等がその要因になっていると考えられる。

ⅱ）病虚弱児：図 12-5

総計 23 人は 1 学年約 1 名の割合であり、数は少ないが過半数の 13 人 56.5%が 8 孤高型、そのうち 8 名が中下あるいは低度に集中していた。精神健康度の低いもの（中下＋低度 11 名 47.8%）の比率が一般集団の 23.8%、病虚弱児を除く孤高型の 24.5%よりも大きいが、高＋中上度 6 名と中度 6 名の計 52.2%が中度以上にいることでも分かるように、身体的ハンデが精神的不健康に直結するわけではない。素直で真面目な子どもで構成されるⅠ、Ⅱ群の病虚弱児 7 名には、1 人の中下あるいは低度者もいなかった。病気の受け止め方は、病状にもよろうが個性によって異なり、情緒不安定が拡大しやすい人柄類型は、精神的健康水準を一定に保つことが難しいのではなかろうか。8 孤高型がその典型として浮かび上がっており、図 12-5 に示したとおり低健康者がこのタイプに多かった。

病虚弱児であるため欠席も多かったのであろう。平均曲線化可能者は 12 名（図 12-1)、分裂型は上昇曲線が多い中にあって下降が目立ち、何よりも情緒不安定を示す曲線動揺が大きい。気力が萎えやすく、敏感を通り越して過敏になっている子どもたちが多いことを示していた。

病虚弱児の場合、親の養育態度とも関連するが、運動に親しむ機会や社会参加の機会等が少ないことによって、情動の抑制機能や自我の発達の不十分さが情緒不安定の要因になっていると思われる。

以上、身体の大きな子は躁鬱型が多く、精神的

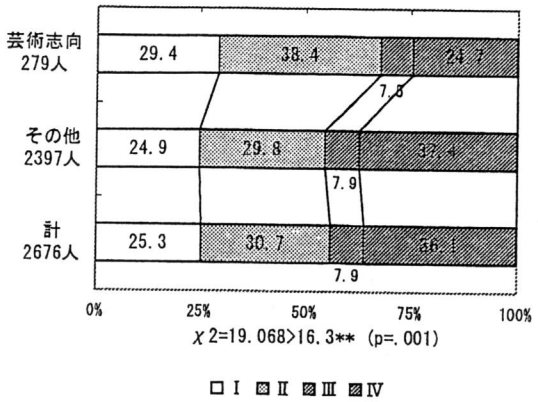

図13-1 芸術志向の子における類似人柄群別分布:%

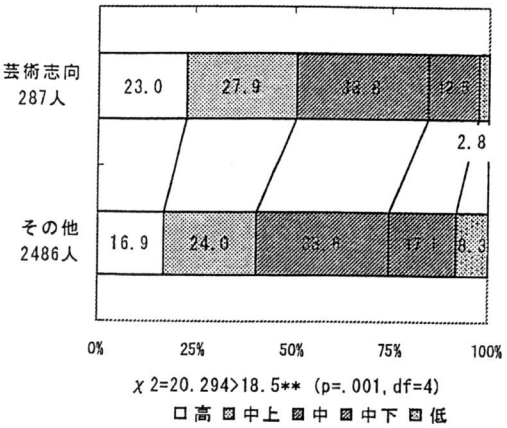

図13-2 芸術志向の子における精神健康度出現分布：%

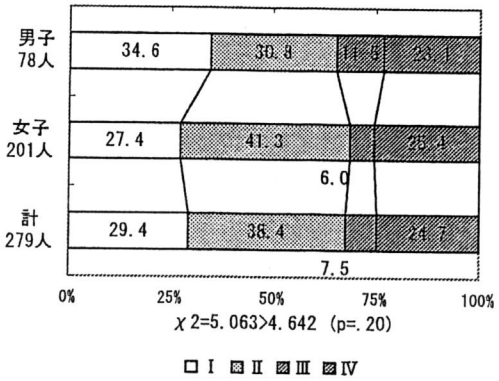

図13-3 芸術志向の子における性別類似人柄群別分布:%

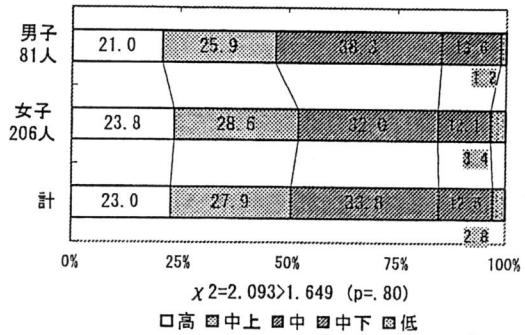

図13-4 芸術志向の子における性別精神健康度出現率:%

健康水準が高いのに対して、小さな子は心的エネルギー水準が低く、気力と粘り不足が著しかった。肥満児と病虚弱児は情緒性不安定と気力不足が顕著に認められた。

2）学業関係4項目

i　学業優秀児：図12-6

知能優秀児の研究において内田・クレペリン精神検査を用いた実験研究がある（森、1972)。これは被験者数が10名と小規模の実験であったが、知能検査の結果から優秀児を選定したものである。前期後期とも優秀児は普通児に勝り、作業量平均42.95を示し、A段階であった。本研究では6年次に学業成績優秀であると教師によって判定された児童の平均曲線を男女別にその他の児童と比較したが、いずれの学年においても作業量平均値が高いことが示された。

ii　芸術志向児：図13-1~5

図13-1は、芸術志向の子と教師が認める子とその他の子の人数を類似人柄群別に集計したものである。芸術志向の子は、Ⅱ群まじめな子が多く、Ⅳ群とっぴな子が少なかった。成人において芸術家タイプの多いⅣ群とっぴな子は少なく、まじめな子に教師はその資質を認めているようである。桜井・八木（1984）は，芸術家のパーソナリティを知るために、芸術大学の学生を対象に性格検査を行い、情緒不安定と社会的不適応、積極性を特徴とする「創作（創造）型」と情緒安定と社会的適応、積極性を特徴とする「演奏（再現）型」の2類型があることを見出している。また、児童の創造的態度に、几帳面、仕事（勉強）に熱心で、好きなことに熱中する執着性格が影響を与えていた（今道、1997)。このことから、小学校教師は、情緒的安定と社会的適応傾向を示すまじめな子の中に、子どもらしい表現として几帳面で熱心な創作努力を評価していると考えられる。

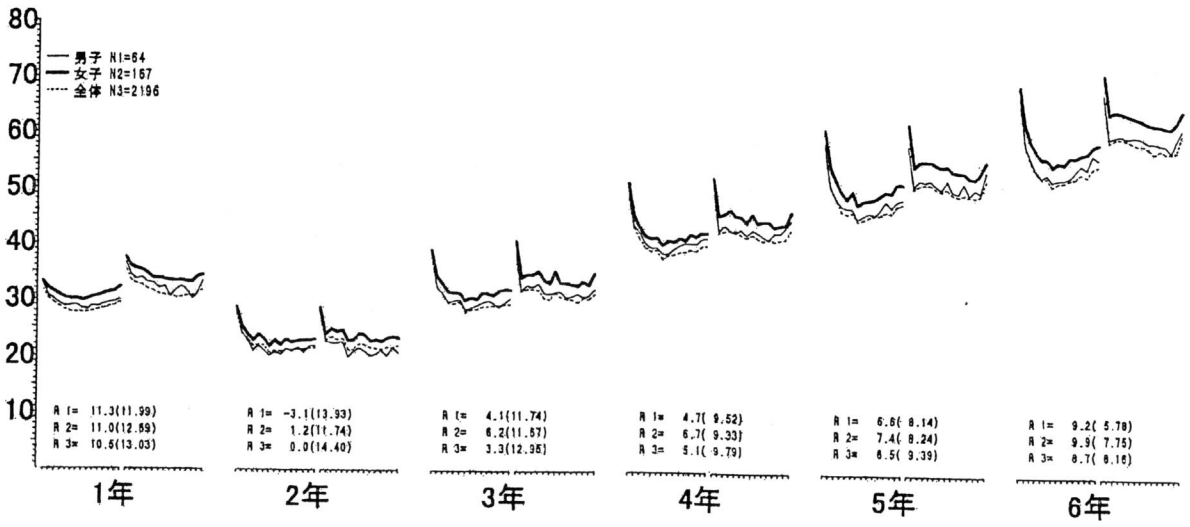

図13－5 芸術志向児童の性別・学年別平均曲線

図 13-2 は、芸術志向の子とその他の子の精神健康度別集計である。芸術志向の子は、精神健康度が高＋中上度の子が多く、中下＋低度の子が少なかった。これは、教師から芸術志向の子として、その創作意欲や努力を肯定的に認められているからではなかろうか。

図 13-3 は、芸術志向の子の類似人柄群×性別集計である。これを見ると芸術志向と教師が認める子は、女子が圧倒的に多かった（男子：女子=81 人：206 人=28.2%：71.8%）。しかし、人柄群別出現率に差はなかった。同様に、図 13-4 の精神健康度男女別集計にも差は認められなかった。

平均曲線（図 13-5）を見ると、芸術志向の男子は、3 年次以降の前期中半から、附属小学校全体の平均曲線よりも興奮の強さ（意欲）を示す上昇傾向が認められるが、その他は、ほぼ同一経過を示した。

一方、女子は群を抜いて作業量が多く、2 年次を除いて後期増加率が高い。図 13-4 に見られるように、男女間の健康度分布に差はないが、平均曲線上に認められる差は大きい。これらのことから、男女とも芸術志向が発達上プラスの働きをしていると考えられる。

以上、芸術志向の子として教師から認められている子どもは真面目な子で，精神健康度が高いといえるであろう。

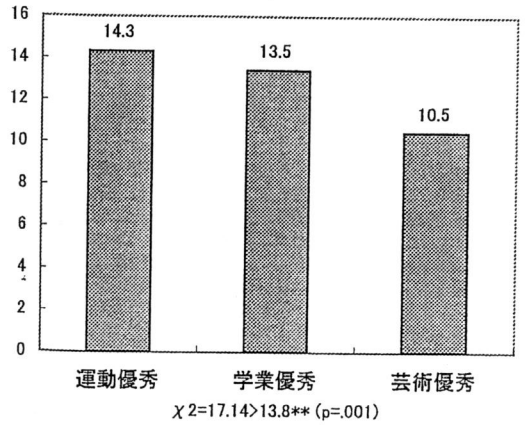

図14-1 優秀児の出現率：%

iii 学業・運動・芸術優秀群について

知的優秀児の研究（森、1971）からは知能と学力の相関が高いことや、教科の好嫌に差があり、体育を一番好きとする普通児に比べ優秀児は算数、国語、理科、社会といった基礎教科を好む傾向が報告されている。

優秀児といっても、芸術などの特殊能力にすぐれた児童は「特技児童」（森、1972）と呼び区別されているものの、その方面の才能を開花させるには、一般知能においても優秀な児童であろうとされている。

本研究における優秀児の判定は６年次を担当した担任教員の判断に基いてなされている。主要４教科に秀でた学業優秀児、芸術関係教科に秀でた

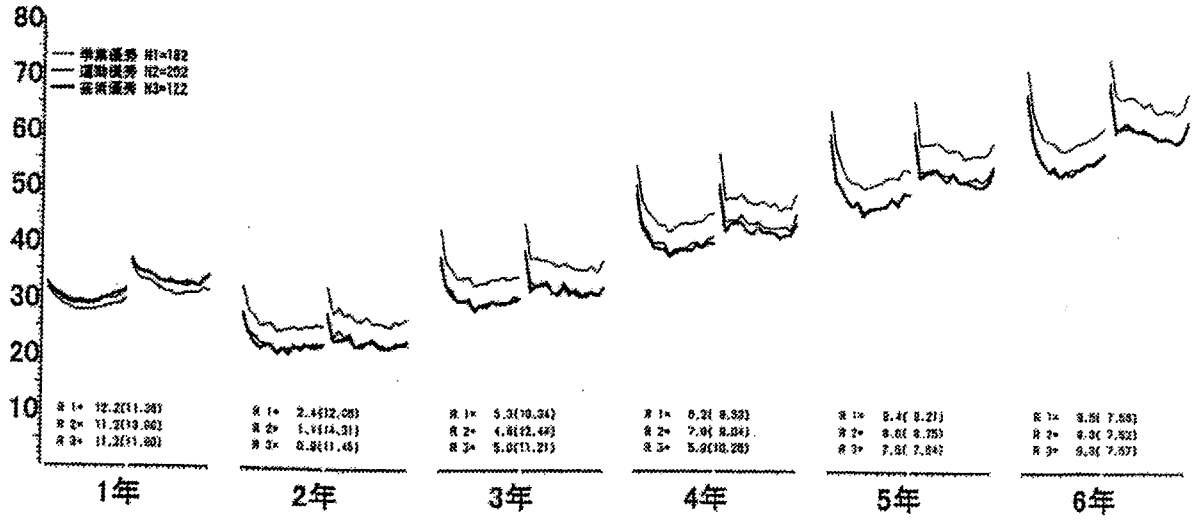

図１４－２　学業・運動・芸術単独優秀児童の心的機能の発達特徴

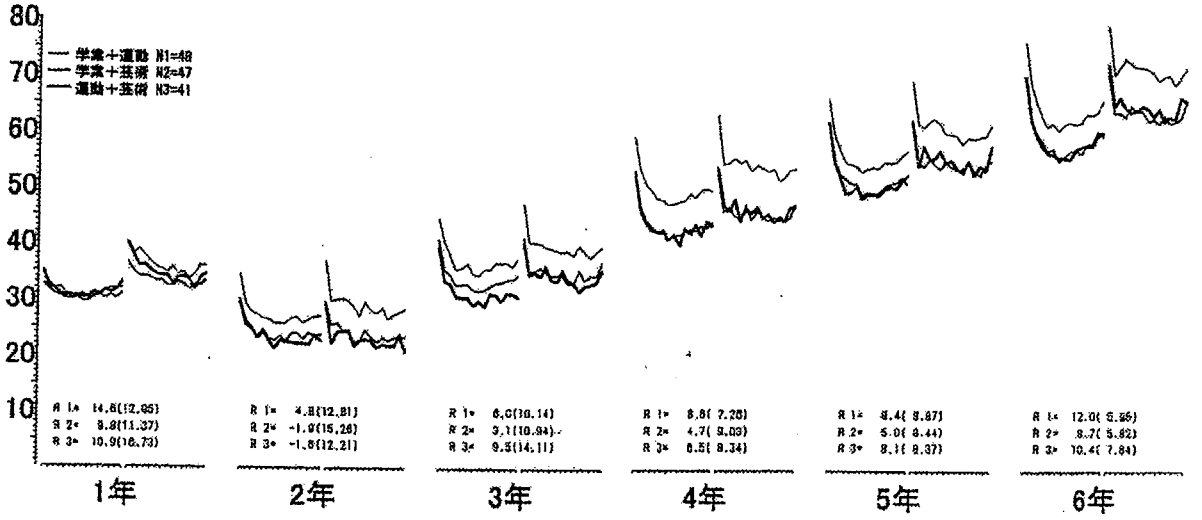

図１４－３　学業・運動・芸術、２項目優秀児童の心的機能の発達特徴

芸術関係優秀児、そして、体育関係で運動の秀でた児童について相互の関連を明らかにしたい。図14-1は学業優秀児童の出現確率を示している。全集計対象者2735名の中で優秀者の出現率は1047人38.3%であった。学業、運動、芸術それぞれの分野での優秀児童の出現比率を比較すると芸術分野の優秀児童が少ないことがわかる。

学業優秀者は6年間×3学期=18回の主要4教科の評点が全て10点満点の児童であり、25期の合計では368名となる。これは1期では14.7人、1クラスの平均では4.9人である。比率にすると、進学志向の下で知的トレーニングを受けた子が13.5%と多めになったものと考えられる。

比率の上で差はないが、運動優秀児は他教科の評点に関係なく、体育の評点がオール10とはいえ、個人的にスイミングスクールや体操クラブ等に通う子どもがいても、多くは正課体育を中心とした評価である。学業優秀児よりも多い14.3%が該当するものの学業評価基準よりも甘い評価基準であろう。しかし、運動パフォーマンスは人目を引くので1期15.7人、1クラス平均5.2人の出現数は学業優秀児同様に多目である。近年の運動優秀児出現頻度の研究（常木,2002）では体育の学習意欲に運動能力を加え18%と報告されている。本研究では運動優秀児出現頻度は教師評価ではあるが14.3%、ほぼ同様の値を示していた。